

大府市

認知症に対する不安のない まちづくり推進条例



ごあいさつ

本市は、昭和45年の市制施行以来、まちづくりの基本理念を一貫して「健康都市」と定め、国立長寿医療研究センター、認知症介護研究・研修大府センター、あいち健康の森健康科学総合センターといった保健・医療・福祉に関する日本有数の研究機関が市内や近隣に所在する恵まれた環境の下、早くから認知症の予防や認知症の人にやさしいまちづくりに取り組んできました。

そのような中、平成19年12月に市内で発生した認知症の人の鉄道事故は、後に家族の監督義務のあり方をめぐって最高裁まで争われることになり、大変大きな注目を集めるとともに、認知症の人やご家族が地域の中で安心して暮らすためには、まだまだ取り組むべき課題があることを浮き彫りにしました。

このパンフレットでは、平成29年12月に、全国で初めて制定した「大府市認知症に対する不安のないまちづくり推進条例」の概要をお伝えするとともに、条例に基づきこれまで皆様とともに進めてきた取組の一部を紹介しています。

本パンフレットを通じて、条例の理念を一人でも多くの方にご理解いただき、皆様と一体となって「認知症不安ゼロのまち おおぶ」を実現してまいりたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。



大府市長
岡村 秀人

「認知症不安ゼロのまち おおぶ」の実現を目指して

認知症について

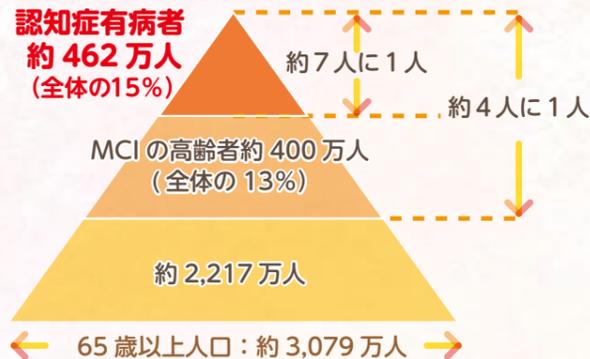
認知症は、様々な原因で脳の細胞が壊れてしまったり、働きが悪くなったりすることで、様々な障がいが起こり、生活をするうえで支障が出ている状態です。

認知症の症状は、脳の細胞が壊れてしまうことによって直接起こる「中核症状」と、本人の性格や人間関係・生活環境・心の状態などによって出てくる「行動・心理症状 (BPSD)」があります。

「中核症状」は一部治療薬で進行を遅らせることが可能になるなど、研究開発が進んでいるものの、治りにくいのが現状です。一方で、「行動・心理症状 (BPSD)」は、環境や周りの接し方が変わることによって改善することができます。



認知症は誰にでも起こり得ることです。65歳以上のうち**約7人に1人が認知症**であり、認知症の前段階である**MCI(軽度認知障害)**を含めると、**約4人に1人**と推計されています。
(※1)



(出典) 厚生労働省科学研究費補助金(認知症対策総合研究事業)「都市部における認知症有病率と認知症の生活機能障害への対応」(平成25年度)

高齢になるほど認知症になる可能性が高くなりますが、65歳未満の人でも認知症を発症することがあります。働き盛りの方が認知症を発症すると、経済的負担や心理的ストレスはとて大きく、早期発見・早期治療がより重要となります。



現在、市内には約3,000人の認知症の人がいると推計されており、今後高齢化が進むにつれ、認知症の人もより増えていくことが見込まれます。



(※1) MCI(軽度認知障害)
認知機能の低下はあるものの、日常生活は問題なく送れている状態のこと。

条例で目指すこと

本市では、平成29年12月、全国初となる認知症に関する総合条例を制定しました。

この条例では、市民、事業者、自治会やコミュニティなどの地域組織、認知症の研究機関や支援機関、そして市がそれぞれの役割をあきらかにして取組をすすめて、認知症に対する不安のないまちを実現することを目指しています。



条例の基本理念

1 認知症を正しく理解して、認知症の人やその家族の視点に立って取り組みます。

2 認知症の人をはじめ、誰もが安心して暮らすことのできる地域社会の実現を目指します。

3 市民、事業者、地域組織、関係機関、そして市がそれぞれの役割を認識し、お互いに連携します。

家族の声

肩の力を抜いて、介護に向き合う

言ったことを覚えていない。母が認知症だと感じた瞬間でした。介護関係の仕事をしていたこともあり、認知症について事前に知識がありました。「とうとう母も認知症になったか」と、受け止めるのに時間はかかりませんでした。

介護保険サービスを始め、使える支援は何でも取り入れながら介護を続けています。他人の手を煩わせることに罪悪感を抱いたり、自分だけで抱え込んだりせず、肩の力を抜いて介護に向き合うことが、母にとっても自分にとってもよいことだと信じています。

気負わず、普通に話しかけて

家族は、特別なことをするわけではありませんが、私の心に寄り添ってくれます。近所の人も母の様子を知り、ひとり歩きをしていると連絡をくれるようになりました。何かしてあげなくてはと構えられるより、無理なく支えてくれる関係の方がこちらも居心地がよく、ありがたいと思っています。

散歩中など、母にどう接してよいか身構えてしまう方もまだまだたくさんいます。認知症になっても地域で暮らす一員として、気負わず普通に話しかけてもらえるようなまちになるといいと感じます。【市内で母親を介護する啓子さん】

日々の介護で感じたことなどを4コマ漫画にしている啓子さん。介護者が思わず「あるある!」と共感できる内容も多く、評判も上々とのこと。





市民の役割

- 高齢者に限らず、誰もが認知症になり得ることを認識し、正しい知識の入手に努めましょう。
- 日常生活の中で自ら認知症予防に努めましょう。



認知症に関する
理解を
深めましょう。

地域組織の役割

地域の住民相互の支え合いの活動に、積極的に取り組みましょう。



お互いの取組や
市の施策に
協力しましょう。

事業者の役割

- 従業員に対して必要な教育を実施しましょう。
- 認知症の人の個々の特性に応じた必要な配慮を行うように努めましょう。



市の責務

- 認知症に関する現状や、認知症の人及びその家族からの要望などを調査・分析し、認知症に関する施策を総合的に実施します。
- 認知症施策を適切に実施するため、必要な組織体制の整備を図ります。

関係機関の役割

- 認知症に関する専門的な知識を有する人材の育成に努めましょう。
- 認知症に係る研究成果に関する情報共有をはじめ、関係機関相互の連携に努めましょう。



例えば…

- 認知症サポーター養成講座を受ける。
- 塩分を控えめにし、お酒はほどほどにして、バランスのよい食事をする。
- 趣味や運動、ボランティア、就労などで日々を充実させ、人と積極的に交流する。



身近な場所での交流の場として、市内各所で開催されている「ふれあいサロン」

例えば…

- 認知症サポーター養成講座などを活用し、従業員の認知症への理解を深める。
- 従業員が認知症になったり、介護することになっても安心して働けるよう、制度を整える。
- 認知症の人でも安心して利用できるサービスや製品を提供する。



事業所内で従業員向けに実施した「認知症サポーター養成講座」

例えば…

- ご近所同士のあいさつや声掛け、見守りなどをすすめる。
- 認知症の人などの行方不明者捜索模擬訓練を行う。
- 地域住民に向けて認知症サポーター養成講座を開催する。



大府コミュニティが実施した、認知症啓発活動「オレンジガーデニングプロジェクト」

例えば…

- 認知症に関する知見や研究成果を発信する。
- 認知症に関するセミナーや講座を開催する。
- 研修会やネットワーク会議などを通じて、情報を共有し、連携する。



医療・介護・福祉・行政の専門職に向けて実施した「認知症対応力向上研修会」

幅広い世代の市民、事業者、地域組織に対し、認知症に関する正しい知識を普及します。認知症サポーター養成や研修会、広報媒体を活用した啓発などを行います。

認知症サポーター養成講座

認知症サポーターは、認知症を正しく理解し、認知症の人とその家族を温かく見守る応援者です。本市では、「認知症サポーター養成2万人チャレンジ」を掲げ、市民向け講座をはじめ、小中学校や市内事業所等でも講座を開催し、養成を進めています。



世界アルツハイマー月間啓発ライトアップ

国際アルツハイマー病協会と世界保健機関（WHO）は、9月を「世界アルツハイマー月間」と定めています。本市は、毎年9月に、市役所庁舎と大府駅西口のオレンジリングモニュメントを認知症啓発・支援活動のテーマカラーであるオレンジ色にライトアップし、認知症の啓発を行っています。



「おおぶ・あったか 認知症安心支援ガイド」等の配布

認知症と診断された人をはじめ、認知症が疑われる人やその家族、認知症について勉強したい人などに向けて、情報提供を行っています。

①「おおぶ・あったか 認知症安心支援ガイド」

認知症初期症状のチェック表や認知症の段階における本人と家族の心構え、支援機関、相談窓口一覧、市の支援内容のご案内などを紹介しています。

②「おおぶ・あったか 認知症安心支援ガイド 別冊資料」

支援ガイドに掲載しているサービス等の、より詳しい内容や、医療機関・介護事業所等の連絡先を紹介しています。

③「認知症の症状と支援の流れ（認知症ケアパス）」

認知症の進行に応じ出現する症状と支援制度について紹介しています。



「徘徊」という表現について

本市では、認知症の人が一人で外出し道に迷うことなどを「徘徊」と表現することが、認知症に対する誤解や偏見につながることから、原則として「徘徊」という表現は使用せず、伝えたい内容に応じて、「ひとり歩き」や「外出中に道に迷う」、「外出後、行方が分からなくなる」などの表現で言い換えています。こうした表現の見直しを通して、認知症の人の行動の背景にあるご本人の気持ちや目的を正しく理解することの大切さを訴えていきます。

認知症に関する研究成果を活用し、予防に関する施策を実施します。健診結果などに応じて、食事・運動・睡眠などの指導や助言を行います。地域における認知症予防の取組を支援します。

※ここでいう「予防」とは、認知症になるのを遅らせる、認知症になっても進行を緩やかにするという意味です。

健診事業

特定健診受診者を対象に、心身の機能低下（フレイル）の早期発見を目的に、「プラチナ長寿健診」を行っています。口腔機能低下に早期に気づき、誤嚥性肺炎やオーラルフレイルを予防するための「食べる機能健診」や安全に運転することが可能な期間の延伸を目指した「運転技能検査」も同時に実施しています。



コグニノート

プラチナ長寿健診受診者を対象に、介護・認知症予防のためのセルフケアを促す活動記録手帳「コグニノート」を配布しています。毎日の歩数や身体・知的・社会活動の実施状況を記録し、市内各所の読み取り機でデータを送信すると、活動結果レポートがフィードバックされ、自己管理の継続をサポートしています。



健康長寿塾

健康長寿塾は、高齢者のフレイルや認知機能の低下を予防するための教室です。身近な場所で気軽に参加できるよう、公民館で実施しています。保健師や歯科衛生士、管理栄養士、理学療法士などの専門職もおり、「まちの保健室」の役割も果たしています。



コグニサイズを楽しもう!

コグニサイズとは、国立長寿医療研究センターが開発した、運動と認知課題を組み合わせた活動の総称です。「どこでも誰でも行える」のが特徴で、運動でからだの健康を促すと同時に、脳の活動を活発にする機会を増やし、認知症の発症を遅らせることを目的としています。

大府市内ではコグニサイズの自主グループが多く活動しています。市が公民館で開催している健康長寿塾もコグニサイズを取り入れています。

例) 足踏み+数を数える、ウォーキング+引き算、ステップ台昇降+しりとり など・・・



認知症の人や家族が気軽に相談や交流ができる場づくりに取り組みます。

早期に適切な支援につなげるため、医療介護連携を進めます。

行方不明となるおそれのある人を見守る体制づくりや、万が一事故にあった際の支援を行います。

コスモスクラブ

本市では、2か月に1回、認知症の人の交流会「コスモスクラブ」を開催し、茶話会やレクリエーションなどを行っています。当事者同士だからこそ共感し合い、分かち合える思いがあり、不安を和らげる等のピアカウンセリング効果が期待できます。



おおぶ・あったか認知症カフェ

「認知症カフェ」は、認知症の人や家族、地域住民、専門職を始め誰もが参加できる交流の場として、市民が自主的に設置・運営しています。本市は「おおぶ・あったか認知症カフェ登録事業」を実施し、広報や運営の一部を支援しています。



認知症介護家族交流会・家族支援プログラム講座

認知症の人を介護する家族等が、同じ立場同士で情報交換やリフレッシュができる場として、「認知症介護家族交流会」を開催しています。

また、「認知症の人と家族の会 愛知県支部」と連携し、「認知症介護家族支援プログラム講座」を開催し、介護者が交流しながら知識を得る機会を提供しています。

交流会に参加してみませんか？

認知症の人の介護の気持ちを、一般の人にすべて理解してもらうことは難しい面もあります。「ここ（認知症介護家族交流会）で話すとスッキリして元気になる。」と、笑顔で帰っていく皆さんの姿を見ると嬉しい気持ちになります。

【認知症の人と家族の会 池田さん】



おおぶ・あったか見守りネットワーク

①メールマガジンの配信

認知症の人などが行方不明になった場合、メールマガジン等で広く情報配信と捜索協力依頼を行い、早期発見につなげています。

また、毎年モデル自治区を選定し、行方不明者捜索模擬訓練の実施や、捜索マニュアルの作成・見直しを行っています。

②認知症高齢者等事前情報登録制度

認知症またはその疑いなどにより、行方不明になる可能性がある方の情報を事前に把握することで、迅速な対応につなげています。

また、届出者の同意を得て、民生委員とも登録情報を共有し、日頃の見守りに役立てています。

③認知症高齢者個人賠償責任保険制度

外出先での万が一の事故に備え、安心して生活できるよう、市が契約する個人賠償責任保険に加入することができます。

